

ファン・ゴッホに献じられたユートピア 大石輝一の「アート・ガーデン」(兵庫県三田市広野)

関 府 寺 司*

巡礼

シンポジウムというものにコア・テーマなるものがあるとすれば、今回のテーマは尾本氏の近著を核とした「芸術家をめぐる巡礼」にあるといつてよいだろう。

そもそも人はなぜ芸術家の巡礼をするのか。芸術家の生家、住居、作品、墓石といった、いわば(聖)遺物の傍に自らの身体を置くこと、そのことにどのような意味があるのか。そしてまた、巡礼地としてある種の成功を収めるための条件とは何か。尾本氏の近著はそのような問題へのアプローチへのきっかけと材料とを提供してくれている。

大雑把に言ってしまうと、芸術にまつわる遺物への巡礼は、宗教的な聖遺物崇拝や巡礼という行動と大差はない。そもそも芸術概念自体がロマン主義以降、宗教概念をモデルに疑似宗教的な概念として成立してきたことを考えれば、そのことも当然の結果だと言ってもよいだろう。世界にひとつしかない自らの身体を聖地に運ぶ、聖遺物の傍に置く、聖遺物に触れる、そのような行為を通じて、聖人たちの宇宙に、そして歴史に自分が連なれた気になる。そうすることで自身の存在のあり方、立ち位置を確認し、ある種の安堵や自己満足を得る。それはそれで意義のある行為だと言えるのだろう。

個人的なことを言えば、私自身はオーヴェール

のファン・ゴッホの墓に行きたいと思ったことはない。オーヴェールやアルルなどファン・ゴッホの「足跡」を訪れたのも、ファン・ゴッホが作品を描くにあたってどのように実景を変化させたかを知るために必要だったからであり、墓にはついでに寄ったというのが正直なところである。友人の勧めでしぶしぶ墓の横に立って記念撮影してもらった記憶はあるが、その友人が写真をくれることもなかった。よほど面倒くさそうな、嫌そうな顔で写っていたからだろう。なぜそのような思ったかはわからなかったが、今考えてみれば、「死に絶えた遺物」には興味はなかったからというべきだろうか。

では、「生きた遺物」とは何か。私がオーヴェールに行ったのはアムステルダム留学も後半、5、6年目ぐらいの時期だった。アムステルダムやオッテルローの美術館には生きた遺産としての作品が大量にあり、ファン・ゴッホの手紙のオリジナルや蔵書などもある。テオ・ファン・ゴッホの子孫も身近にいて、ひ孫は同世代、一緒に遊びに行ったり、食事をしたり、彼らの結婚式にも出た。そのような多くの「生きた遺産」に囲まれた環境にいる身としては、墓は文字通り遺物にすぎず、関心が薄いのも当然だったのかもしれない。無関心を通り越してさらに「嫌そう」だったのにはおそらく他の理由もある。そこに立つことで自分の立ち位置を確かめるようなことは殊更する必要もなく、また、そんな行動を記録するのも嫌だったのだろう。

多くの日本人画家がオーヴェールを訪れ、芳名

* 大阪大学大学院教授

録に記帳していた頃も、ファン・ゴッホ兄弟の墓はすでに遺物だったはずだが、現代との違いは、この地にはガシェ家とガシェの息子という生きた遺産もあったことである。これだけ多くの日本人がオーヴェールを訪れたのは、「墓参り」の文化的意味の他に、生きた遺産としての、「墓守」としてのガシェの存在が大きかっただろう。

アート・ガーデン

兵庫はファン・ゴッホと妙にゆかりのある土地である。『ゴッホ展 Vincent & Theo van Gogh』(2005年 札幌、神戸) のカタログでも紹介したように、芦屋の山本願彌太郎には第二次大戦期までファン・ゴッホの《向日葵》が所蔵されていたし(空襲で焼失)、第一次大戦中には、ファン・ゴッホが名付け親となった甥のフィンセント・ファン・ゴッホ氏が神戸に1年間滞在している。

兵庫県三田市広野には、1960年代に画家大石輝一が作ったアート・ガーデンという場所がある。その建設の経緯や現状、それらに関連する現存資料(ファン・ゴッホ美術館所蔵)については先述の展覧会カタログで紹介したが、この展覧会は東京圏では開催されなかったし、アート・ガーデンの現場もアクセスが容易でなく、旅行者が足を伸ばして行けるような場所でもない。このシンポジウムではその現状を画像やビデオで紹介しつつ、巡礼地となり得なかった場の問題と合わせて提起しておきたい。

当時、広野は緑豊かな田園地帯であり、大石は「南仏アルルの野に類似している」という理由で、この地に敬愛するファン・ゴッホと弟テオとその妻ヨハンナの名前を刻んだモニュメントを私財を投じて作った。除幕式にはオランダ総領事夫妻も出席し、朝日新聞社もこの式典に関わっている。その後も武者小路実篤から贈られた「ゴッホを想う詩碑」、柳宗悦七回忌に「民芸の父・柳宗悦先生の讃碑」、ロマン・ロラン生誕百年を記念

する「ロマン・ロラン記念碑」などが次々に建てられた。大石はファン・ゴッホ氏宛の手紙で等身大のファン・ゴッホ像を造りたいと述べているし、複製美術館も建てたいと考えていたようだが、これらの計画は実現しなかった。

1972年に大石が亡くなってから、アート・ガーデンは急速に忘れられ、荒れるにまかされていたようだ。この場所は、ファン・ゴッホ「巡礼地」としての地位を得るには、何一つとしてファン・ゴッホの「聖遺物」を持たず、都市部から容易に足を運べるような場所でもなかったこともあって、忘却、荒廃の運命を辿ろうとしていた。ただ、幸いなことに、大石がファン・ゴッホの甥に送っていた手紙や資料、写真がファン・ゴッホ美術館にまとまった形で保存されていた。先述の『ゴッホ展 Vincent & Theo van Gogh』カタログに掲載した拙論「ファン・ゴッホと兵庫」は、これらの資料をもとに執筆したものである。アムステルダム「聖地」に保存されていた資料のおかげで、忘却に歯止めをかけることができたのである。現在、地元にも保存の動きはあり、ボランティアなどによる整備も行われている。

文化財や歴史資料は約半世紀後の対処でその運命が決まる。アート・ガーデンはまさにその半世紀後の岐路にあると言ってよい。三田市広野はまだ緑豊かな地域だが、近隣には工業団地も建ち始め、開発の波は迫っている。今後の動向によっては破壊、消滅の危険もないとはいえない。

大石輝一

大石輝一は1894年(明治27年)大阪に生まれ、1916年から岡田三郎助の本郷洋画研究所で学び、洋画家としての活動を始めた。1923年の関東大震災を機に大阪に戻り、兵庫県西宮市に居を構えている。夙川の一角に茶房ラ・パボーニを立て、邦子夫人が経営した。このラ・パボーニは壁画で装飾されていたが、1995年の阪神大震災で倒壊

してしまった。夫妻はここを拠点にさまざまな活動を行っていたが、なかでも大石がもっとも情熱を注いだのが三田のアート・ガーデンである。

大石はこの三田の土地を1960年に購入し、二年後の1962年にここに「ヴィンセント・ヴァン・ゴッホの記念碑」を建てている。除幕式は盛大に行われ、政治（知事、市長）、外交（領事）、財界（日蘭協会）なども絡み、一時期、文化事業のような様相を見せたこともある。大石はここでさまざまな活動を企画し、さらに多くのモニュメントや複製美術館を建てることも夢見ていたようだが、美術館の計画は実現しないまま、1972年に大石は他界している。

コンセプトとしては大石のアート・ガーデンの美術館はクレラー・ミュラー夫人が構想し、実現したクレラー・ミュラー美術館に似通った部分もある。僻地にあり、真剣なモチベーションを持つ人だけが訪ねて来る「巡礼型美術館」であり、記念碑としての性格をもっている。もちろん、両者の財政規模は比較にならないほど違った。実業家として成功をおさめたクレラー・ミュラー氏は、鹿狩りの出来る広大な土地を購入し、敷地内の住民には立ち退きのための十分な補償をし、ポーランドから鹿狩りのための鹿まで輸入して公園内に放したという。その財力で夫人がファン・ゴッホの作品も大量に購入し、現在のクレラー・ミュラー美術館を広大な敷地の中心に築いたのである。規模も質もあまりに違うが、芸術の巡礼地を作りたいという欲望は共通している。

ともあれ、大石の死後、「墓守」を失ったアート・ガーデンは一気に忘れられ、荒れるにまかされていた。ここにはファン・ゴッホ巡礼地となるための必要条件、つまり「聖遺物」が何一つない。かろうじて破壊を免れ、半世紀を生き延び、保存の動きが出てきたのも、「ファン・ゴッホ巡礼地」を作りたいという大石の情熱の大きさゆえだといつてよい。今後、ファン・ゴッホ崇拝の一現象として、生きた形で保存していく方策を地元自治

体を中心に考えて行くべきであろう。

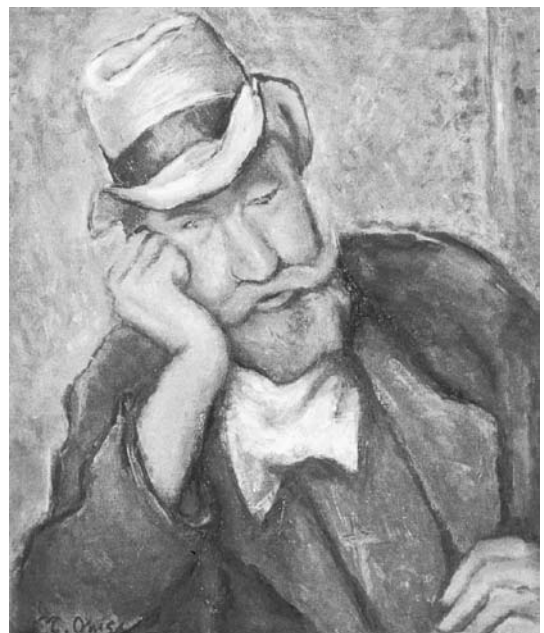


ファン・ゴッホ記念碑

左4図 ファン・ゴッホ記念碑除幕式



神戸新聞 1997年9月27日



大石輝一《心の自画像》1972年 絶筆
西宮市大谷記念美術館